

# イタリア年金者組合 第21回全国大会を傍聴して

加藤 益雄

## はじめに

250万人の組合員を擁する欧州最大の社会組織、イタリア年金者組合（SPI-CGIL）の第21回全国大会が2023年2月21～24日、イタリア北部の古都ヴェローナで開催された。大会には、ロンバルディア、エミリア＝ロマーニャをはじめとする全国20州から648人の代議員および、中央本部（ローマ）の書記長、書記次長をはじめとする執行部20数人が参集した。これに、年金者組合のない北欧諸国とロシアを除く欧州各国と日本の年金者組合が招待を受け、私が全日本年金者組合を代表して参加した。

日本の参加は、前年（2022年）11月に京都で開催された第35回日本高齢者大会の大ホールでの学習講座「世界の高齢者との大交流会」の報告者として、イタリア年金者組合の代表を招き、終了後、東京で全日本年金者組合との交流に招いたことに端を発したものであった。

その3カ月後に開催されたイタリア年金者組合の大会参加者は、ヴェローナ市内のいくつかのホテルに分宿し、他国からの招待参加者は大会会場まで徒歩15分ほどのホテル（クラウンプラザヴェローナ）に宿泊した。

SPI-CGILの大会参加のための私の旅程は、大会前日の2月20日正午過ぎの東京発で、フランクフルト経由、シュツットガルト乗り換え、ヴェローナ着22時40分というものであった。夜

遅い時間のため、入管職員1人が通路の真ん中に立ったままでパスポートをチェックし、口頭で入国目的を聞いてきただけであった。帰国時、東京での入国審査は、コロナの影響で通常よりも手間がかかり、経由したフランクフルト空港での乗り換えは、どこも人があふれ、食事をとることもできなかった。

SPI-CGIL大会は、21日午後2時から24日午後4時15分まで、ヴェローナ見本市会場（ヴェローナフィエラ）で開催された。会場は、幕張メッセの約3倍、バスケットボールコートなら20面以上分はあろうかという巨大な会場で、入ると舞台ではすでに女性5人のポップパンクバンドで賑やかだった。大半は女性の役員らが準備と仕切りを行っていたが、こうした取り組みは大会の4日間連日、俳優でLGBTQIの活動家やストリートアーティストなどがゲストとして招かれていた。

正面壇上の左脇にはイヴァン・ペドレッティ書記長、右脇にはミナ・チローニ書記（女性）が着席して4日間の大会議事運営をすすめた。中央舞台での進行のすべてが左右の巨大なスクリーンに投影され、会場のどこにいても視聴することができた。

## 大会1日目

ミナ・チローニ書記が開会宣言。参加の諸団体を紹介し、大会の任務と課題、ロシアのウクライ

ナ侵攻、イタリアの最近の選挙と民主主義の状況、ジェンダー問題と教育の現状、伝統と文化などを語り、イタリア年金者組合 S P I - C G I L の長い歴史と労働運動へのコミットに誇りを持つと述べ、大会の各委員会を選出した。

資格審査委員会報告に続いて、自身も以前は年金者組合の組合員であったというヴェローナ市長が歓迎のあいさつ、人口減少と若者の現状、家計の変化などすべての年齢層を考慮した市政を進めると述べ、続いてヴェローナ S P I - C G I L の書記長がヴェローナの反ファシズムの歴史と伝統を誇りにしているとして参加者を歓迎した。

続いて、ペドレッティ書記長が過去4年間の運動の取り組みの経過報告を行った。経過報告は、すべて正面および左右のスクリーンに投影された。その後、1時間半にわたって基調報告と、次の4年に向けた運動方針ととりくみの課題を提起した。全体で2時間を超える熱弁であった。

報告では、3年間のコロナ禍の下で、各地で電話連絡をとるなど結びつきの維持に努めたが、3万5千人の組合員を失ったことが語られた。書記長は、パンデミックに打ち勝ち、イタリア共和国憲法の価値、理念が生きる運動を強めなければならないと訴えた。その上で、次のようなことが強調された。

女性の社会的活動に積極的な大きな変化が起きている。イランなどもそうだが、イタリアでも女性の活発な活動が進行中だ。今大会ほど女性が大きな役割を果たしていることはなかった。

ロシアの戦争には全世界の労働組合の行動が求められている。この分野の問題は、米国ではなく欧州で解決することが大事だ。全世界の戦争反対の共同が求められている。

議会に向けて、人権と若者、移民のための取り組みなど、年金者組合は右翼政権との違いが明確

な労働者・市民の運動を進める。年金だけではない、雇用と賃金、ユニバーサルなシステムをめざす。政治への権利は世代間で同等に扱われる必要がある。

欧州の年金者組合が掲げる Active Aging (生き生きと積極的に年を重ねる) を促進することが我々の役割だ。あらゆる分野で右翼との違いを明確に示していく。

これからの運動のポイントに、①平和的外交の推進、②統一こそ原点、③とりわけ高齢者医療の拡充・刷新、④社会保障の拡充、⑤市民の権利・民主主義を土台とした統一の追求と推進を掲げたい。

最後に、イタリアの年金改善の運動を共同して取り組んでいる三大労組の他の年金者組織 F N P - C I S、U I L P - U I とは、1968～69年の三大労組のゼネストで資本主義国で最も前進した年金制度を実現したが、S P I - C G I L の組織の飛躍的な拡大はこの三大労組の統一以後に可能となったと述べ、この共同の立場はゆるぎないことを強調した。

続いて F N P - C I S、U I L P - U I 両組織の書記長からそれぞれ挨拶・発言があり、さらにベルギーのブリュッセルに事務所を置く欧州高齢者・年金者組合連合 (F E R P A) の書記長、イタリアパルチザン協会会長のあいさつで初日を締めくくった。

## 大会2日目

午前、外国からの参加者31人は S P I 国際部の案内で、観光バスでヴェローナ中心部を観光。ホテルにもどっての昼食時は、各国代表との交流の場であった。ハンガリーの年金者組合委員長(82歳)は、「アジア系はカトーと私だけだ」と言って話しかけてきた。ブダペストの大学教授で、F

ERPAの書記長もしていたという。

昼食後、大会会場に行くと、フランスの代表2人だけが前日と同じ席で参加していた。代議員の発言が始まっていた。私も早速、英語通訳を聞くために、パスポートと引き換えでイヤホンを借りに行く。

各代議員からは、

- ・若者の仕事はどうなっているのか、社会が変化中、年金者組合の仕事も変化する
- ・遅くならないうちに年金者組合の活動を変えていこう
- ・経済社会の変容の中、深刻なのは貧困問題。25%の人が貧困ライン以下、人権問題でもある、新しい取り組みが必要だ
- ・平和が第一。ヨーロッパの第一義的とりくみとして、ロシアのウクライナ侵攻をストップさせよう
- ・エネルギーの問題も重要だ。ゼロエナジーの暮らしを家庭でも事務所でもとりくもうなどの発言があった。

続いて6人のジャーナリストが壇上に並び、それぞれ10人、計60人にインタビューした報告が語られた。「非正規雇用の人たちが他者とのコミュニケーションが取れず、物価高騰の中、労働市場で孤立化していると感じた」、「民主主義と市民の権利擁護が大事だと思った」、「メローニ政権の年金への攻撃は許されない」、「パンデミックと医療の現状に驚いた」、「素晴らしい憲法だが、現実はどうか分析が必要」、「労働者の現状と動向にジャーナリストがどう関わっていたかが問われている」、「パンデミック後の現政権のやり方は、かつての右傾化と同じだ」、「シチリアの最近の選挙で左派政権が勝利した」、「南イタリアは北部より遅れている」、「低年金・低賃金で社会的保護と保障が不十分」、「シチリアの自立性、特に医療と教

育が遅れている」、「年金者組合も入っての民主的な討論が必要」、「子どもたちの権利のために」などが語られた。

最後に、ルチアーノ・ラーマやベルリングルの70年代からの活動家、カストリーナ女性教育プログラム長が、マルチメディアによる歴史アーカイブスで、戦闘的な反ファシズムのたたかいを紹介し、「男女間の民主主義の大変な時期を過ごした」と振り返りながら、パンデミック、民主主義の不足、市場経済、差別など多くの課題がある中で、自主的な労働組合の活動はどうだったのかと問いかけ、右翼的な年金改定の動きや、急速な高齢化の進行、地域での健康で文化的な生活が失われ、移民や仕事を求める若者の暮らしも大変になっているとして、CGILは変わらなければならないと話した。

カンブリア州の代議員は、女性へのジェンダー差別、女性への暴力がまだまだ続いている。若い女性は昔の男女間の理解とは違うと話した。

大会資料には、『健全な経済的持続可能性 あなたのスタイルを選んでください』と題する、全24ページすべてカラー刷りの小冊子が入っていた。その中には、ペドレッティ書記長とミナ・チローニ書記の連名で、「私たちは変化を生み出します」という表題の3ページの案内文があり、今後のイタリア年金者組合の女性のいっそうの活躍を予感させるものだった。

## 大会3日目

午前、英・仏通訳は全く無しだったが、ジャーナリストの司会のもと7人の代議員の発言があった。さらにウクライナなどヨーロッパの直面する問題についてレオポルド・タルタニア国際部長が

報告発言。時間をオーバーする発言だったが、たびたび場内から拍手が起こった。

3日目午後は、以下のような代議員の発言とゲストの発言が続いた。

◎地方で活動するアントニオはCGILへの信頼を深めている、その対応と方針に感謝していると話した。

◎コロナ禍で大勢の高齢者が亡くなり、代わりに60%が女性の役員になった。右翼政権は信頼するに足らない。CGILこそ信頼に足ると多くの人々が認め、存在感がある。様々な機関にSPIの活動を伝え、具体的な取り組みを進める。

◎最南端カンブリア州の女性代議員は、「1960年代から活動している。ぜひ、若者にも伝えよう。やることは一杯ある、しかし活動家が少ない、相談には行列ができる。みんな発言が長い」と述べて拍手が起きた。

◎サルデーニャの女性代議員「CGILの年金者組合を誇りに思う。島民の高齢者の30%が組合員、しかもみんなボランティアの組織であることだ。子育てや、独り身の高齢者の支えとなっている。改めて憲法に立ち返ること、今は、医療にもっと人を！の運動をすすめている」。

つづいて、ILO労働者委員会副委員長のアン

ナ・ヴィヨンディさんが、「全世界が働いている」と題して、同委員会の仕事と役割について話した。ヴィヨンディさんは、イタリアのナショナルセンター、CGILの出身で、イタリアは現在115のILO条約を批准しているが、その他の条約についても、さらに批准をすすめてほしいと話した。（日本の少なからぬ組合も、ILOでヴィヨンディさんには会っているはずです）

## 大会4日目（最終日）

私たち外国からの参加者31人の昼食は、いつものホテルのレストランではなく、大会会場向かい側にある代議員専用の昼食会場であった。大会会場と全く同じ広さの大ホールで、イタリア側の700人近い大会参加者全員がブロックごとにくつろぎのテーブルごとにまとまって食事をしている。そのわずかな一角の4つの円卓テーブルで、地元国際部のメンバーとともに最後の昼食をとった。

巨大ホールの一角には書籍販売のコーナーがあり、1910年代のグラムシから始まるかつてのイタリア共産党幹部の諸文献をはじめ、今日の民主党が発行する書籍や定期行物を取り扱っていた。全国各地からの代議員、特に女性の参加代議員らが本を買い求めていた。

（かとう ますお・全日本年金者組合書記次長）